

わたしはすでに世に勝っている

「ヨハネによる福音書」16章 29～33節までを朗読。

33節「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。

これはイエス様が十字架におかかりになる直前、過越の食事会の席、いわゆる最後の晩餐と言われている席で、お話しになったメッセージの最後のところであり、イエス様はこの後すぐに、捕らえられて、十字架に釘づけられ、墓に葬られることとなります。しかし、弟子たちはそういう事は全く知りませんし、これまでと同じように、イエス様は変わりなく、いつまでも共にいて下さるものだと思っていました。ですから、イエス様が十字架にかけられて、殺され、墓に葬られた後、弟子たちは当惑し、混乱し、思い悩む事態の中におかれます。恐れにとらわれてしまいます。しかし神様は、そこから御霊、ペンテコステの霊を注いで、弟子たち一人一人を、新しく造り変えて下さいました。

何よりも大切であったことは、神の霊が一人一人に宿ることです。キリストの霊、神の霊、聖霊がすべての人に注がれたのが、ペンテコステの出来事であると同時に、イエス様の救いの完成、それがこのペンテコステでもあったと言うこと

ができます。というのは、イエス様の救いは何かというと、私たちの内にキリストが住んで下さることです。キリストが住むとは、聖霊が私たちに注がれることなのです。ともすると、救いと言うと、目の前の問題、悩みや困難や悲しい事態、事柄が解消していく、あるいは思うように、願うようになっていくことが救われると思いがすいのですが、神様が私たちを救うとおっしゃるのは、人と神とが共に生きる者となることです。神様は、人を最初にお造りになった時、ご自分のかたちにかたどって造り、いのちの息を吹き入れて、人と神とが何一つ隔てなく、生きる者とされました。神様の霊の力によって、いのちの息によって、人は生かされておりました。だから父なる神様と人が一つになる。一つになるとは、おかしな話ですが、何の妨げもない、裸で恥じない関係があった。それがエデンの園の生活でありました。そこには恐れも不安も悲しみも憤りもない。平和が、安心が与えられ、また平安な日々が与えられていたのです。

ところが、人は造り主である神様を忘れて、身勝手に、自己中心、わがままな思いによって、神を離れてしまう。己を神とする。己を義なるものとしてしまう大きな罪を犯してしまったのです。その後、神様は私たちを惜しんで、愛する故にこそ、何とかして、もう一度、創世の初めの、人と神とが共に生きる者としていと願って下さった。というのは、そう

でなければ、人の本当の安心だとか平安がないからです。造り主である神様と被造物である私たちが、一つになって、何の妨げも、隔てもなく、親しく、神様に信頼できたら、人は本当に幸せだと思います。なかなかそこに至らない。それは、自分という肉にあるものが、常に神様と私たちの間を裂こうとしてくる。これがサタンの力です。不安を投げ込んできます。恐れを抱かせます。いろいろな作用が働いて、神様を信頼できなくさしてしまう。これが最も不幸なことです。その結果、喜びを失い、望みを失い、感謝できなくなり、平安を失う。絶えず不安と恐れとに囲まれ、つぶやき、いらだち、憤りの中に過ごしてしまう。そのような失われた私たちが、神様は救いに引き入れようとして下さった。その一つのモデルと言いますか、かたちとして、アブラハムを選び、イスラエルという民族を通して、神様は、ご自分の救いの何たるかを証明しようとなさったのであります。

ところがイスラエルも罪なる人の姿で、問題多い民であり、一筋縄で、神様の与えようとする恵みに行き付くことがなかなかできませんでした。ですから、イスラエルは、神様から選ばれた選びの民だと自負していましたが、しかしそれにふさわしいもの、どこを見ても、その名に恥じない、神様の栄光をあらわす器となっていたかという、決してそうではありません。あっちで失敗し、こっちでやり損ないます。それでも、神様は彼らを捨てないのです。神様は「一度我に来たる者我これを捨てじ」とおっしゃるよう

に、決して、神様は彼らを捨てない。それは私たちに対するメッセージでもあります。出たり引っ込んだり、転びまろびつの歩みでしかないイスラエルの民を、神様は忍耐強く耐え忍んで、持ち運んで下さる。神様の立場に立つならば、到底耐えられない、こんなもの捨ててしまえ、無きものにしてしまいたいに違いない。それでもなお、忍耐し続けて下さる。今でもそうです。神様は、私たちの具体的な日々の生活の必要を知らないと言われる方ではありません。日々の生活すらも、神様はすべての必要を満たして下さる。あり余るほどではないかもしれない。しかし不足しないように、十分なだけのものを、必要な時に、必要なだけのものを、神様は私たちに与えたもうお方でありませぬ。

イエス様が「だから、何を食べようか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな」(マタイ 6:31)とおっしゃいます。これらのものはすべて主がご存じであって、父なる神様はそれが必要であることをご存じです。神様はイスラエルの民に対しても、彼らの必要なもの、マナをもって、ウズラをもって養い、育て、荒野の旅路を持ち運んで下さった。神様はイスラエルを通して、救いが何であるか、それは“神われらと共にいます”ということです。神様が彼らと共にいて下さる。これがイスラエルにとって、何よりも幸いな恵みでありました。ですから、神様はどんなことがあっても、彼らと共に絶えずいて下さった。彼らが失敗した時でも、背く時があろうと、神様は決して彼

らを捨てない。そして絶えず彼らと共にいて下さった。「出エジプト記」を開きたいと思います。

「出エジプト記」33章 14～16節を朗読。

これはイスラエルの民が大失敗した時です。モーセが神様の律法を受けるために、シナイ山に登り、神様の臨在の中にとどまっておりました。40日近く長い間、ふもとで待っていたイスラエルの民は、指導者であるモーセが一体どうなったのかわからない。とうとう不安になりまして、彼らはアロンを指導者に立てて、金の子牛を造って、これが神であると、その神を拝む者となった。そして賑やかな祭りをする。ところが神様はそれを知り、モーセに「急いで下って行け、民はとんでもないことをしてしまった」と言われ、モーセが山を下ってみますと、イスラエルの民が偶像を拜んでいる。そこでモーセは大変憤って、神様からいただいた、十戒を記した石の板を、地面に勢いよくぶつけます。そしてさらに神様に背いた者をそこで殺してしまいます。イスラエルの民は大変な大きな過ちを犯したのです。その時、神様は「イスラエルの民とは付き合っていけない」「お前たち、勝手にせよ」と言われた。ところがモーセはそこで神様の前に立ちほだかって、とりなしをします。「あなたは私たちをここまで導き出した神ではありませんか。事業を途中で投げ出すようであれば、他の人たち、神様を知らない人たちから、あなたは笑われますよ」と言ったのです。そう言われると、神様も何ともしようがな

い。そのことが今読みました、33章の所に記されています。最後の所に、モーセが神様に語ったのが、今お読みしました記事であります。

14節から読みますと、「主は言われた、『わたし自身と一緒に行くであろう。そしてあなたに安息を与えるであろう』。モーセは主に言った、『もしあなた自身と一緒に行かれないならば、わたしたちをここからのぼらせないでください』。神様、あなたが私たちと共に行かれないのであれば、私たちはここから先に進む行くことはしません。神様が共にいることが、私たちのすべてです。その後そう語っています。16節に「わたしとあなたの民とが、あなたの前に恵みを得ることは、何によって知られましょうか」と。私とイスラエルの民とが、神様の恵みにあずかる、その恵みとはいったい何なのでしょうかと問うています。私たちにもこのことは問われます。私たちにとって、恵みとは何なのでしょう。それを神様に問いかけ、また、モーセは、16節の後半に、「それはあなたがわたしたちと一緒に行かれて、わたしとあなたの民とが、地の面にある諸民と異なるものになるからではありませんか」と語ります。神様が共におられる、これがイスラエルのイスラエルたるゆえん。これがなくては、イスラエルの民は普通の民とどこにも変わりありません。他の民族とイスラエルが異なったものであると言えるのは、「神われらと共にいます」という、この事だけだと言うのです。神様が私たちと共にいらっしやらなければ、この民は十把ひと

からげ、他の諸民族と同じである。私たちがイスラエル、神の民と言われるなら、あなたが私たちと共にいて下さいと、モーセは神様に談判をする。これは神様が私たちに与えようとする恵みでもあります。私たちもかつては神様を知らず、またイエス様のことも知らなかった。ただ自分が、自分がと、俺が、俺がという自我性と言いますか、肉にある自分の思いだけが、すべて正しくて、それが一番良くて、それを妨げるもの一切が、私に敵するものと、己を義とする自我が支配していた。そのために、私たちと神様とは隔たった、遠く離れたものであった。その隔ての中垣、私たちと神様とを妨げていた一切の障害を、神様は取り除いて下さったのです。これが十字架であります。ご自分のひとり子をこの世に遣わして、あの十字架に釘づけ、私たちの罪の一切を彼に負わせて、すべての者の罪ととがを取り除いて下さったのです。それは何のためか。私たちがきよい者とし、神と人とが共に生きることができるものにして下さった。

神様は聖なるお方、義なるお方、いと高きところに居たもうお方であります。罪なる者、汚れたる者と共に、住むことはできません。神様は光のようなお方であって、曇り一つないと、「ヨハネの第一の手紙」に語られています。光と闇とは交わることができないのです。闇を取り除いて、神の光の中に入れて、私たちとひとつにして下さる。これが主イエス・キリストの十字架です。イエス様は私たちの罪のために、あがないとなって、命

を捨てて下さった。私たちもまた、キリストを信じて、私の罪は一切処分されて、終わっている。しかし、現実、私たちがきよらかな、きれいな心になっているかという、肉にあって、なお古い自分がいくらでもあります。しかし、信仰によって、イエス・キリストを信じることによって、私たちは義なる者とされるのであります。私たちの行いによって、わざによって、品行方正、どこにも非の打ちどころのない、人格者になることが救いではない。だからと言って、そのままでもいい、お前は変わらないでいいのだというわけではありません。神様は私たちが造り変えて、肉なるものを取り除いて、まったくきよい者として、神様の前に立たせて下さる。これが約束であります。これは私たちが絶えずイエス・キリストを信じ続けていく結果、得られるものです。イエス・キリストと共に生きること。これがきよめです。なぜならば、私たちがイエス様と一緒に生きようとする、おのずから自分にある、汚れたるもの、不義なるもの、肉につける思いと、どうしても戦わざるを得ない。悪しき思いと、決別していかざるを得ない事態、事柄の中に置かれるのです。

救いにあずかって、今、この地上に、なお命を与えられています。現実、いろいろな問題を与えられます。具体的な生活の中で、いろいろな所を通されます。その中で、古き自我と言いますか、古きものとしての肉につける思いが、絶えず働くのです。しかし、その悩みや悲しみ、苦しみや、いろいろなこの世の軋轢の中

で、私たちが神様の前に立ち、キリストの御言を通して、絶えず光を照らされることによって、その問題を通して、きよめられていくのです。肉につけるものを取り除かれて、「ただ主のみいます、イエス様、あなただけです。私の頼るべきお方はあなた以外にありません」と、心一つになるように、神様はいろいろな事の中に、私たちを置いているのです。私たちが問題を通る度ごとに、私たちの思いを洗いきよめて、余分な所はそぎ落として、ただ思いはキリストと私だけというところへ、押し上げて下さいます。これは自分でなろうとしてもなりません、神様のほうが、具体的ないろいろなことを通して、私たちを訓練し、きよめて下さる。今、その道中にあるのです。

その中であって、神様は、神の霊、キリストの霊を、絶えず私たちに注いで下さる。私たちはひたすら主に信頼し、主のみ声を聞き、主に従うことを努めて生きさえすれば、肉なるものを、神様は取り除いて下さる。「わたしは命じる。御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことがない。」(ガラテヤ 5:16) と約束されている。私たちの肉なるもの、自我性は、はぎ取ろうとしてもなかなかできません。しかし、私たちがただひたすらに御霊に従っていこう、キリストの霊、キリストご自身に仕えていこうと努めさえすれば、そこをきよくして下さる。だから、現状を見て、自分の行いや、自分の心のさまざまな、ドロドロとした情欲や欲情、いろいろな思いにばかりとらわれたらダメです。それは

それとして、否定はしません。ありますが、私は主に従って行きますと、絶えずキリストが共にいて下さるところに、心を向けていく。それを努めていくことが、私たちの救いであります。なぜならば、神様は私たちと共に住むために、私たちの罪のあがないとしてひとり子を遣わして下さったばかりでなく、私たちをきよめて、キリストの霊を内に置いて下さったのです。この御霊の力によらなければ、人は変わることができません。また神と共に生きることができない。御霊が私たちの内に宿って下さる、これこそがイスラエルの民が味わった、神と共に生きることの恵みです。そこに今、私たちも置かれているのです。

ですから、日々の生活、どんなことの中にも、そこに主が共におられますと信じていく。そして、その主に仕えていくということを努める。どんな小さなことでも、そこで、「主よ、これはあなたのみこころですから」と信じて、歩んでいく時、自分のわがままな思いに従うことができなくなってしまいます。また自分の肉の欲に従うことができなくなります。御霊はそのことを教えて下さる。キリストの霊である御霊は私たちの内に宿って、力づくでひっくり返すお方ではありません。優しい御声をもって、常に私たちに語りかけて下さる。時に私たちはその御霊の声がうるさくて、耳をふさぐかもしれません。しかし、いろいろな事を具体的に神様は起こされます。その中で私たちが主に聞かざるを得ないように変えて下さる。自分自身の事もそうですし、ま

た周囲の事もそうです。そこに必ず御霊が、神様が共にいて働き、神様のみわざが進められていくのです。それは私たちが生涯をかけての神様の恵みの中に生きることでもあります。

初めにもどりますが、「ヨハネによる福音書」16章33節の御言、「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。ここに、「わたしにあって平安を得るためである」とあります。これらの事とは、ヨハネの14章から始まって、神について、子なるキリストについて、聖霊なる神についてと、一つ一つ追いつながら、イエス様は語っておられます。そういう話をしたのは、わたしにあって平安を得る、キリストと共にあることによって平安を得ることができるからだと。私たちの平安は何によって得られるのでしょうか。見える状態や事柄、あの事、この事が思うように、願うように行きさえすれば、平安であると、こうなれば安心だと思えます。しかし外側のものというのは、時々刻々状況は変わっていきます。今不安だと思っていることは、もうしばらくすれば、まず別の事に変わっていくのです。私たちにとって絶えず平安となる源、力は、どこにあるか。それはキリストそのものを自分の内に宿すことです。神の霊が私たちの内に宿っておられることをはっきりと自覚する、信じる事です。

イエス様がここに語っておられるように、「わたしにあって平安を得るためである」。キリストが平安そのものであると。イエス様が共におりさえすれば、実はそれこそが平安ですが、イエス様を信頼しなければ、いつまでたっても平安はありません。イエス様が弟子たちとガリラヤ湖を渡っている時に、突然突風が吹いて、波にのまれそうになります。大慌てをして、ペテロや弟子たちは一生懸命助かろうとします。ところがイエス様は平然と寝ていらっしゃる。その時、ペテロは「死にそうです」、そう言ってイエス様に迫ります。イエス様は起き上がって、風をしっかりと沈めて、「信仰の薄い者たちよ。なぜ疑ったのか」と（マタイ 8:23-27）。イエス様はそこにいらっしゃるのですが、イエス様を信頼しない。イエス様が共にいらっしゃることを信じ、信頼して、イエス様はできないことのない神なるお方であると信じないからです。だから大慌てをする。不安になり、平安を失う。イエス様は平安そのものですから眠っておられる。平安の源であるイエス様を忘れて、何とかして自分たちの平安を得るために、ああもし、こうもし、水を掻きだし、命を救おうと、あっちへ走り、こっちへ走りする。イエス様は「信仰の薄い者たちよ」とおっしゃいます。

今、私たちも事実、その通りです。何をもって不安を得ていますか。今、私たちの内にキリストが宿って下さって、主がおられるのです。その主を見失う時、私たちは不安になる。主がおられることは知ってはいるが、信じなければ、弟子

たちと同じであります。今一度、わが内にキリストが宿っている、主が共におられますと信じる。これが何よりも幸いなことであり、これが、私たちに与えられた救いです。というのは、そのすぐ前の、32節のところを読みますと、「見よ、あなたがたは散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとりだけ残す時が来るであろう。いや、すでにきている。しかし、わたしはひとりではない。父がわたしと一緒におられるのである」とあります。これはまさにその通りで、あなたがたは散らされて、自分の家に帰り、わたしを残す時がくると言われる通りです。ところが弟子たちはそうは思っていない。どんな事が起こるのか、わからない中で、イエス様はちゃんとわかっていました。弟子たちが耐えられなくなって、逃げ出していくに違いない。その時、イエス様は一人ぼっちになるに違いない。でもここでイエス様がおっしゃるのは、「しかし、わたしはひとりではない」と。これは私たちにも同じです。

ともすると、自分は一人でこの悩みを抱えているように思っている。実はそうではなくて、私は一人でいるのではなく、イエス様が共におられるのです。この時のイエス様は誰と一緒にだったのか。父がわたしと一緒におられる。イエス様は父なる神様がいつもわたしと共におられるのだと、片時も忘れない。だから、どんなことにも強いのです。パリサイ人であろうと、律法学者であろうと、時の権力者であろうと、イエス様が大胆に立ち向

かう事ができた秘訣は、彼らを恐れないからです。何よりも一人でいるのではない。父なる神様が一緒におられるのだから。そのようにイエス様は父なる神様が共におられて、どんな中にあっても、平安でおられるのです。33節「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。キリスト、イエス様が世に勝っているのは何か。父なる神と共にいることです。あの十字架の苦しみの中にあっても、なお、「父よ、父よ」、と父なる神様と共におられた。しかし、最後の最後に、極悪非道の犯罪者として、神様からさばかれた時、さすがに神とキリストの間が断たれてしまう。父なる神様は、ご自分の子であるイエス様を、わが子ではない、罪人として、断罪なさいました。そのとき、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27:46）と、父なる神様から完全に切り離された時、これがイエス様の一番の苦しみです。槍でつかれようと、茨の冠をかぶらされようと、釘でうたれようと、それは確かに痛みの極みであります。しかし何よりもイエス様の痛みは、父なる神様との交わりが断たれてしまうことです。

ところが、その中でも、イエス様は徹底的に父なる神様に信頼し続けて、自分の一切を主の御手にささげきったのです。罪人とされながらもなお、父なる神様のあわれみを信じて、一切を十字架にささげきった生涯でありました。ここでイエス様は「わたしはすでに世に勝っている」

と。何によってイエス様は世に勝ったのか。父がわたしと共におられる、この一点です。このことによって、イエス様は世に勝利していったのです。あの十字架の御苦しみの中にあっても、父なる神様と、共にいます主との交わりの中に、絶えず置かれている。そしてイエス様はよみがえって、今度は今、私たちといつも、どんな時にも、共にいて下さる。信仰によってキリストがわたしたちのうちに住んで、その愛の広さ、長さ、高さ、深さを悟ることができるようにと、「エペソ人への手紙」に語っています。キリストが私たちのうちに住んで下さる。

内住の主という言葉を使いますが、これが私たちの最善の救いであり、恵みです。いつもどんな時にも、神の御霊が私と共にいて下さる。そこに目をとめていく時、イエス様がそうであったように、わたしはすでに世に勝っているのです。どんなことにも恐れがない。それにうち負かされることない。絶えず神様が力を与えて下さる。それを乗り越えていくことができる。イエス様が何を力とし、何によって、慰められ、力づけられていたか。それはただ一つ、父がわたしと一緒におられるからである。

「ヨハネによる福音書」8章16節を朗読。

「しかし、もしわたしがさばくとすれば、わたしのさばきは正しい。なぜなら、わたしはひとりではなく、わたしをつかわされたかたが、わたしといっしょだからである」。

ここでイエス様は、「わたしはひとりではなく」と言われています。わたしは一人ではない。わたしをつかわされた父なる神様が、いつもわたしと一緒におられる。これがイエス様の生涯を貫いた力です。これを欠くならば、私たちと同じ単なる肉にある人でしかない。イエス様が救い主として、神の御子としての生涯を貫き通した秘訣は、父がわたしと共におられるというこの一点。それと同じように、「わたしにならえ」とおっしゃるのです。わたしがそうであったように、今度は神の霊、聖霊があなたがたの内に宿っているのだから、あなたは一人じゃない。あなたはすでにこの世に勝利したわたしと共にいるのだから、恐れることはいらない、おののくことはいらない。私たちはこの主を見失う時に心に不安を覚える。

33節に「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである」。わたしにあって、キリストによって、私たちははじめて平安を得ることができる。「あなたがたは、この世ではなやみがある」。その通りです。私たちは日々様々な悩みの中に置かれます。「しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」。世に勝つ、言い換えると、イエス様がどうやってこの世に勝つ、あの十字架の苦しみをも乗り越えていったか。ただ一つ。わたしを遣わされた父なる神様が、わたしと共におられる。わたしは一人ではない。私どもは、すぐに「あの人は良いわね。子供たちがいて、あんなに親孝行の子がいて。私はひとり

ぼっちで」と、自己憐憫に陥りやすいのですが、何もあわれむことはしない。もっと堂々と、主がわたしと共におられる、私ほど幸せな者はありませんと、はっきりと告白する信仰に立って、今日も主よ、あなたと一緒に歩ませていただきますと告白しましょう。

「わたしはすでに世に勝っている」、勝利して下さった主が、わたしのようにあなたも生きる事ができるのですよと、イエス様が勧めて下さる。この主の平安を、力を、またイエス様が握っておられた望みを、私たちも同じく共にいただいて、勝利していきたいと思います。

ご一緒にお祈りを致しましょう。